

卒業論文の要旨

論文題目	日本の小学校における外国語教育の意義とその問題点 -複言語教育の可能性-
氏名	大竹 百葉
メジャー	英語専攻
<p>(要旨)</p> <p>本論文は、小学校における外国語教育の意義と課題について考察し、本来的な小学校における外国語教育の意義、現在の外国語教育が英語に偏るようになった背景、そして日本の小学校における外国語教育への提案として複言語教育の可能性を探ったものである。</p> <p>まず、小学校の学習指導要領を基にした外国語教育、すなわち英語教育への偏重を、海外での外国語教育を参考にしながら指摘し、特に、フランスにおける地域語を含む多様な外国語教育、韓国における世界の人々と触れ合うための基礎となる諸外国語教育を重要視し、日本の教育制度に取り入れていくべき要素について述べている。</p> <p>次に、小学校の外国語教育における今後の可能性を探っている。小学校という人格形成の基盤とも言える時期に、ある特定の単一言語だけで彼らの可能性を狭めるのではなく、中国語・韓国、朝鮮語・フランス語・ドイツ語と特定の複数言語を教育に導入し、子どもたちが自ら選択して学べる環境を整えるべきであると主張する。その実現に向けては、解決すべき諸課題は山積みであるが、社会における外国語＝英語という先入観なくし、言語学習の目標を人間形成と捉えなおして複数言語の教育が実現するよう議論を展開している。</p> <p>最後に、複言語教育の現実的な導入をより一般的なものにすることで、その実現の可能性が高められると主張する。日本の近隣諸国であるアジア地域の国々も目覚ましい発展を遂げ、今では経済面から見ても日本には欠かせない存在になりつつある。外国語という概念を広げ、子どもたちにとっても、日本の経済社会にとってもより開かれた方法で世界とのつながりを持ち始めるべきであると述べている。</p>	
<p>(指導教員の推薦のコメント)</p> <p>この論文は、単に現在の小学校における英語教育の問題点を指摘しているだけでなく、それに代わる複数の外国語の教育の利点を、様々な客観的資料を基に述べ、さらに、それを実現するための様々な問題点を過去のデータなどを元に解決策を提示し、結論に導いている。</p> <p>論文としての表現は十分とは言えず、所々分かりにくいところはあるが、論理的で客観的な結論の導き方はかなり優れているものと言える。</p>	